

(1) 飯田市五郎田遺跡出土の直弧文の描かれた高坏について

遠藤恵実子

1 はじめに

リニア中央新幹線建設に伴う飯田市五郎田遺跡の本調査は令和3年度から開始し、弥生時代から古代の集落跡が姿を現わしてきている（遺跡の詳細は、年報38・39号を参照）。遺物も多量に出土しており、基礎整理作業を行うなかで、令和3年度の調査で出土した古墳時代中期の高坏に「直弧文」が描かれていることが判明した。

土器に直弧文が描かれている例は、飯田地方では初めての出土例であり、今回は現段階で確認できたことについて紹介する。

2 出土遺構

直弧文の描かれた高坏が出土した土坑（SK265）は古墳時代の竪穴建物跡（SB21）と重複し、本跡の方が新しい。

SB21の床面検出時点での規模は100cm×64cmの楕円形である。確実に土坑覆土となるSB21床面から底部までは16cmあり、底部に近い位置から高坏をはじめ小型壺・甕などが出土しており、これらは埋納したものと推察する。なお、この他にも遺跡内では同様に高坏が出土しているため、高坏が出土する土坑自体は特別な存在ではない。



第1図 直弧文の描かれた高坏

3 直弧文の描かれた高坏

高坏（第2図）は、器高13cm、口径17.2cm、底径12.8cm、脚部高8.1cmである。このうち直弧文は脚部と裾部に描かれている。

坏部は外に開き、脚部から裾部が屈折する。胎土から在地産のものと推定される。なお脚部内側にあるナデ調整は、同じ遺構出土の文様のない高坏脚部にはナデがないことから、他のものよりも丁寧に作られているとみられる。

脚部と裾部の直弧文の形態は、異なっている。以下、脚部と裾部の各文様について述べる。

4 文様の概要

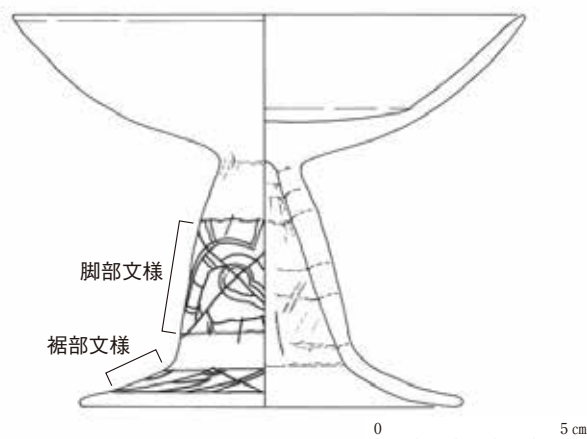
（1）脚部（第3図） 脚部は全体が出土しており、文様の全体を見ることができる。文様の構成は、底部から2.4cmと6.3cm上に一周する直線が引かれ、この間3.9～4.4cm（3図展開図での幅）が文様帯となる。この上下の横線を結ぶX字の区画が2カ所向き合う位置に描かれる。このX字を中心に、いわゆる直弧文の渦状などの弧線表現にあたる文様①がある。2つの文様を比較すると反転した状態で描かれ、さらに中央の勾玉状の文様は反転後に90度右に回転した位置となっている。

またこの文様の間には、区画線と中央文様線をつなぐ弧線②が右上と左下にそれぞれ2本入り、その中央に同じく弧線1本が、横方向には弧が上を向き、縦は横線を中心に上線が右側に、下線が左側に弧が向く線が入る。ただし、この文様は片方のみで、もう片方はこれの半分（3図左端）のみとなっている。この違いは割付の問題であると考えられる。

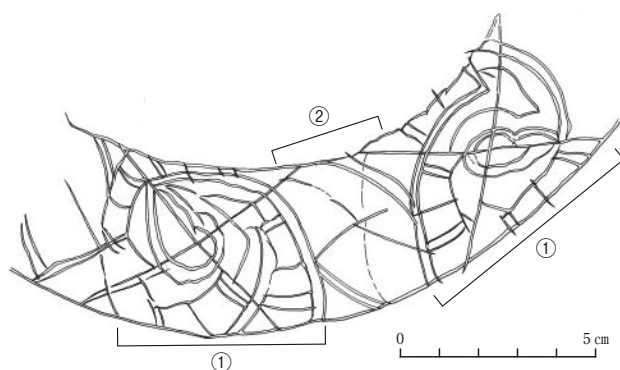
施文順序は大きく、上下の区画線→中央のX字区画（右上から左下の線が先）→X字区画を中心とした文様①→文様間の弧線②の順で描かれている。特に上下の区画線は連続せず何回か切れていることから、土器を手に持った状態で、上下直線

とX字の区画は土器を左回りに回して描いている。また、下書きや割付けなど、文様以外の線や修正をした痕などが見られないことから、フリーハンドで一気に描かれたものと考えられる。

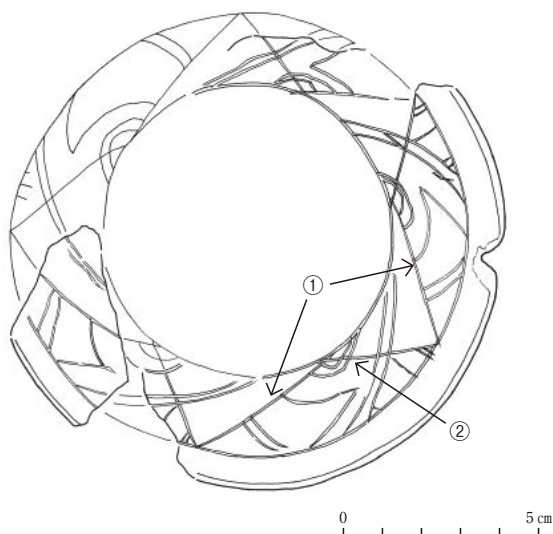
(2) 裾部(第4図) 欠損しているため、残存は全体の半分ほどである。上下に1周する区画線



第2図 高坏実測図(1:3)



第3図 脚部文様展開図(1:2)



第4図 裾部文様実測復元図(1:2)(1本線部 文様復元)

は、下線(端部側)は裾端部から0.7~1cm内側に、上線(脚部側)は下線からほぼ2cmの幅で一周し、この間の幅(1.8~2.0cm)が文様帯となる。この上下の区画線を鋸歯状に区画する斜走線により、上線を頂点とする三角形と下線を頂点とする三角形が交互に5個ずつ描かれる形となっている。文様の区画は、右上から左下の斜線①(文様区画線)の間に1区画、左上から右下の線②(中央斜線)が1区画の中央に入る構成となり、文様区分も5区画となる。

各文様の構成は、文様区画線と中央斜線の交点下から中央斜線の右側にかけて半円形が2本線で、文様区画線と右側と中央斜線の上部の中間から、中央斜線の中心を通過して左下にいく2重の斜めの弧線が入る。区画左側には、下区画線から上に2重の斜め弧線に沿って2重の弧線と文様区画線の交点までの半分の高さまでの弧が下を向く線と中央斜線の真ん中からこの弧線にあたる弧線が入り、この線の左側に文様区画線から下部の区画線までの2重の弧線が入る。区画は正確な5等分ではないことから、割付や下書きは行われていないとみられる。施文順序は、上下1周する区画線のあと斜線の区画が入るが、先に区画線5本、その後に中央斜線5本が土器を左回りにして上線から下線へと描いている。そして最後に文様区画線に合わせて中の弧線の文様が描かれている。上下円形の区画線は正円に近く一定であり、コンパスのような道具が使われた可能性が考えられる線となっている。

(3) 施文工具

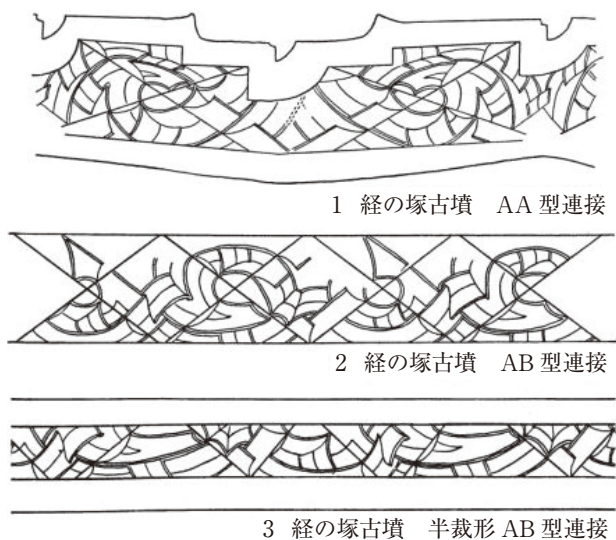
文様線の観察を細かく行ったら、描かれている線は、筆圧の強弱による変化はあるものの、基本的には1mm弱の幅である。工具は先端が尖ったものと考えられ、胎土には1mm前後の礫が入るが、線が深く入った箇所でもこの礫の剥離や移動が少ないという特徴があることから、尖った部分が長い、細長い形状のものと考えられる。

5 直弧文の文様について

直弧文は、古墳時代前期から後期と古墳時代全

般を通してみられる文様で、九州に多い装飾古墳の石障や石棺のほか、刀剣装具が多くあり、このほか埴輪や鏡にも描かれている。

本遺跡の高坏は、脚部の文様がAA型連接形の完形で、1区画の文様が反転した中央文様の間に中間の文様がある（5図-1に類似）。裾部はAB型連接の半裁形に分類される（5図-3）。



第5図 直弧文の分類図（伊藤1980より引用）

6 飯田地域の直弧文

飯田地方は、国史跡飯田古墳群に代表される、中期から後期の前方後円墳を中心とした古墳が多く造られた地域である。特に中期では馬の埋葬土坑や馬具を持つ有数の地域で、馬匹文化を受容した馬生産の地としての中央政権とのつながりや半島に関わる渡来系の要素が強い地域である。

これまでに飯田地方で直弧文が確認されているのは、埴輪や刀剣装具で、いずれも古墳出土の遺物であり、古墳に関わるものである。

このうち埴輪については、溝口の塚古墳で直線を組み合わせた文様が見られるが、模倣などが考えられ、直弧文の文様を理解していたとは言い難いものである。本遺跡の直弧文に近いものとして、鹿角製の刀剣装具が挙げられる。

鹿角製刀剣装具は、5世紀中頃から後半の溝口の塚古墳、月の木1号墳、妙前大塚古墳から出土している。鹿角製という性質から、刀剣に対し残存が一部となるが、この中で残存状態が良好な溝口の塚古墳例は、主体部出土の鉄剣と鉄刀があ



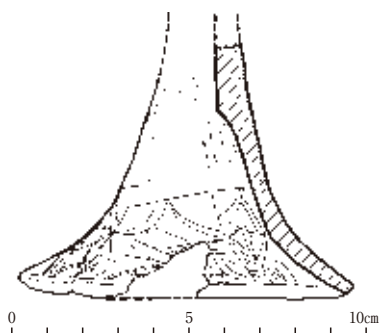
第6図 溝口の塚古墳出土剣装具（飯田市教育委員会提供）

る。鉄剣では、把頭の位置の飾り板（第6図、註1）、直刀では、鞘口と鞘尻で直弧文を確認することができる。飾り板はA型（単位）の完形。鞘口と鞘尻は文様幅から半裁形の文様とみられ、直弧文の形としては、AA型・AB型連接の半裁形である。飯田の古墳に副葬された刀剣装具では、把頭にA型完形、把縁ほかにはAA型またはAB型の半裁形が使われている傾向がある。

刀剣装具においては、把頭にAA型・AB型連接形の完形が、把縁にはAA型・AB型連接形の半裁形が多く、鞘口、鞘尻では半裁・完形の両方が使われている。こうした状況を踏まえ、本遺跡の直弧文が描れた部位をみると、脚部は円錐形で把頭に似た形に、裾部は平面を開いた形で帯状に展開する柄縁に似る。刀剣装具の文様構成と本遺跡の高坏を合わせてみると、AA型連接形の完形の把頭の文様が脚部に、裾部の半裁形の文様は柄縁や鞘口、鞘尻にあたる文様と推測される。高坏が屈折形で脚部と裾部が明確に分かれている器形に、部位の形状によって刀剣装具と文様を合わせた可能性が考えられる。

7 土器に描かれた直弧文

土器に直弧文が描かれ、本例のように2パターンの文様があることについて考えてみたい。土器への直弧文の施文は、出土例はさほど多くないうえ完形が少なく破片のみの場合が多い。この中で全体の様子が分かる布留遺跡（奈良県）出土例（第7図）は、古墳時代中期の高坏で、ハの字に広がった脚の下部に1周した文様が描かれてい



第7図 布留遺跡出土 高杯の直弧文
実測図（竹谷1994より引用）

る。全体に1構成の文様で、中心に入るX字区画がみられないなど、文様構成は異なるが、1周する文様が5区画に分けられるという共通点

がみられる。本遺跡例が器形を意識して文様の配置を行った可能性からみれば、脚部の形が異なることが考慮されている可能性も考えられる。

8 鹿角製刀剣装具の文様との関係

直弧文が描かれた鹿角製刀剣装具の中心となる時期が中期前葉から後期前葉であり、本遺跡出土高杯も同じ時期である。

鹿角製刀剣装具は、畿内周辺でその大半が生産、供給され当時の中央集権が生産と分配を管理、把握していたものである。生産地が限定・管理された定型化した文様構成であることは、連接法則など「直弧文がきわめて厳密な法則性をもつ」（伊藤1980）ものであることからすれば、特に5世紀を中心とする鹿角製刀剣装具ではこの法則性が守られているということは重要である。

鹿角製刀剣装具の直弧文の著名な例として、経の塚古墳（宮城県）の刀装具（5図）、磯間岩陰遺跡（和歌山県）の刀剣装具がある。これらの直弧文は文様の反転など法則性の高いものであり、本遺跡例は上記例に類似した文様の形といえる。逆に溝口の塚古墳などの例との比較では、上下線とX字による区画といった基本的な構成は同じであるが文様自体は異なっており、本遺跡の直弧文は、飯田地域の古墳に納められたものよりも、経の塚古墳や磯間岩陰遺跡などの遠く離れた場所のものと文様形が近い。これは地元古墳の刀剣の模倣ではなく、古墳時代中期に畿内の管轄のもと生産され地方に配分されたものと同じということがいえ、本遺跡の直弧文を描いた人物は、畿内にて刀剣の製作に関わっていたことが考えられる。

9 直弧文の描かれた土器からみた飯田地方

本遺跡に直弧文の描かれた土器があることについて、現状で考えられることは、①直弧文は、文様の法則性に則ったもので、描き方からも文様を熟知した人物によって描かれている。②在地の土器に描かれ、その土器が埋納されたのは集落内の土坑内であり、遺跡内では普遍的に行われている方法によるもの、の2点である。

①については、畿内において刀剣装具の制作など直弧文を描くことに携わっている人物が飯田地方にいたことがいえる。②では、本遺跡の高杯を埋納する土坑が複数存在するという集落の中では普通にみられる風習の中に、畿内中央から首長に送られた「威信財」に関わる文様が描かれた高杯があるという特異な点は、今後集落の性格を考えるうえで重要となる。本遺跡の人々は直弧文の意味を知っていたのかも知れない。

本稿では類例等を十分に検討しきれていないため、推定のみで実態はつかめてはいない。しかし、本遺跡から出土した直弧文の描かれた土器からは、元々畿内地方とのつながりが強かった飯田地方において、直弧文という古墳時代中期に中央から地方にもたらされる威信財の制作に関わる人物の存在が示唆された。本稿では資料の紹介をするにとどまったが、直弧文の描かれた高杯が飯田地域にある意味など、さらに検討を続けていきたい。

執筆にあたり、飯田市教育委員会下平博行氏、春日宇光氏の御教授を得た。記して感謝申し上げる。

註1 素材について、報告書では「骨製の可能性が高い」とされているが、鹿角製の可能性がある。

〈参考・引用文献〉

- 伊藤玄三 1980『直弧文』ニューサイエンス社
- 竹谷俊夫 1994「布留遺跡出土の土師器直弧文高杯について」『天理参考館報』天理大学付属天理参考館
- 菊池芳朗 2021「古墳時代鹿角製遺物の生産と流通にかんする予測—刀剣装具を中心に—」『磯間岩陰遺跡の研究 分析・考察編』
- 飯田市教育委員会 2001『溝口の塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2007『飯田における古墳の出現と展開』
- 飯田市教育委員会 2012『飯田古墳群』